

ぼちぼちいこか

都心の異変 光陰矢の如し

伴 勇貴

ねんねんさいさい はなあいになり
年年歳歳 花相似
さいさいねんねん ひとおなじからず
歳歳年年 人不同

毎年、花は同じように咲いているが、
それを見る人は同じ人だとは限らない

そんな唐詩を思い浮かべながら「都心の異変——桑田変じて滄海となる」を書いてから、もう一年が経つ。実にいろいろな出来事があったが、振り返ると、あつという間の一年だった。とくに何かに忙殺されたという訳ではない。ただ、過ぎてしまったとしか言いようがない。まさに「光陰矢の如し」である。

日常の活動はイラク戦争や日本企業の再編成などの影響を受けているが、埋没させられるまでではない。仕事は結構忙しいが、それで拘束されている気分にはまらない。政治的関心は強いが、それで怒ったり走り回ったりまではしない。カネは欲しいが、自分個人のために画策するまでの気は起こらない。食い物に対する関心は人並み以上に強いが、行列してまで食べようとは思わない。

ファッションとかブランドも、良いモノは良いとは思うが、値段を見ると関心が失せる。阪神優勝には驚いたが、それを喜ぶ気分にも、それで騒ぐ気分にもならない。ゴルフも止めてから久しく、いくら楽しそうな話を聞いても朝早く起きて遠くまで出かけようという気持ちにはならない。山登りはやりたいが、北アルプスや南アルプスではなく高尾山あたりで十分と思い、それすらも実現しないでいる。ドライブも二〇〇から三〇〇キロぐらい遠出して走れば満足する。

だから時間にも気持ちにも余裕があるはずである。それなのに、気が付いたら絵画館前の銀杏並木は新緑から深緑に、そして黄金に変わり、ついに葉っぱもなくなっていた。散歩の折に実のなり具合を観察し、今年こそ早朝に行つて銀杏を採ろうと思っていたのに、その機会を逸してしまった。

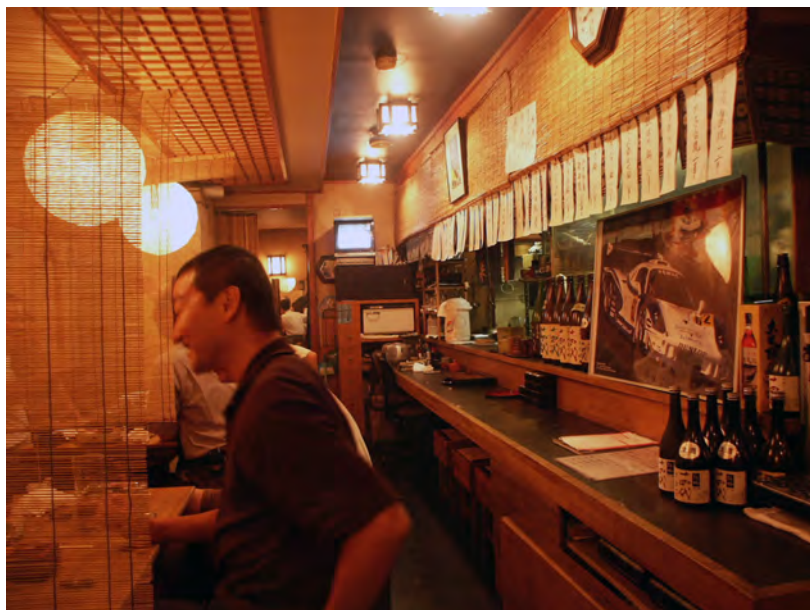
酒で大病を患ったのに、また凝り性もなく飲み始めている。飲み過ぎだと注意されることが多い。しかし、昔とは違う。

クラブや料亭などは縁遠く、飲んで歌って騒ぐのは苦手で、近くの居酒屋で六〇年代、七〇年代のロックなどを聴いて喜んでいる。十二時過ぎに、もう一軒などいうことはない。自宅だったら日本酒を二合も飲むとほろ酔いになる。ドクターストップになったらいつでも止めると言いながら、タバコもスパスパ吸っている。

と言って、体調が良いのかと問われると、自信を持って良いと言えるほどでもない。しかし、悪いのかと聞かれると、悪いとも答えられない。どう頑張っても、かつてのようなバカ元氣は無理だし、そもそも良い悪いの基準が曖昧になっている。

もちろん年二回の徹底的な人間ドックと月一回の定期検診は欠かさず、一日に五回の二種類の注射と食中食後の四種類の服薬（と言っても消化酵素、乳酸菌、それとビタミン剤だけ）と就寝前の二種類の服薬（胃薬と抗血小板剤）は続けている。

さらに体調に素直に従って、折を見ては麻布の整体と市ヶ谷の鍼にも通っている。お陰で検査数値データも画像診断結果も、今のところさぶる健康と太鼓判を押されている。

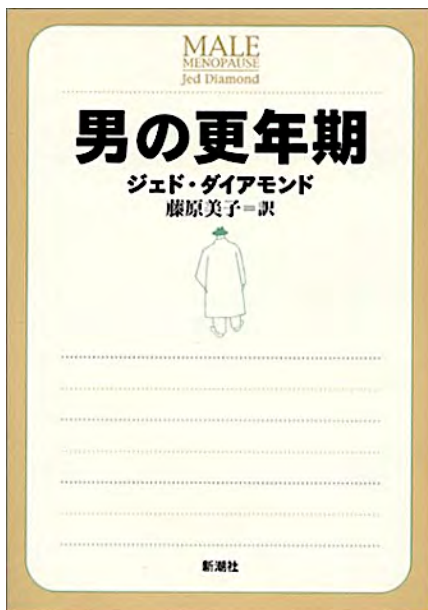


「男の更年期」

三〇代になると、頑張っている時に、フツと歳を感じるようになる。それをやり過ぎし四〇代に入る頃、昔から厄年やくどしと言われている通り、油断していると大病を患う—— 事実、僕も倒れた。しかし、それを乗り越えようと、何となく六〇歳ぐらいいまでは辿り着く。そこで還暦という言葉がある通り、また転機を迎える。これを作り過ぎすと、その後しばらくは平穏な時期に入る—— こんなことを人生の大先輩たちから、若い頃、何度も聞かされてきたが、気が付いたら自分が、そんな話をするようになっていた。

同年代の仲間が何となく集まって飲み始めると、最近では、身体の話題に行き着くことが多い。その中でも今年のビッグニュースは「男の更年期こうねんき」と「赤玉ポンあかだま」である。男にも更年期が存在する。たしか、そんな題名の本も出てくるくらい今では知られていることだ。

考えてみれば、男でも加齢かれいでホルモン分泌機能が低下すれば、バランスが崩れ、いわゆる自律神経失調症に陥おちいつたとしても不思議ではない。それに身近な友人たちが陥るようになると無視は出来ない。



Mさんも今年初めに陥つたらしい。普段は明るいMさんが妙に元気がない。病院でいろいろ調べたのだけれど、問題はないという。でも、調子が悪い。そんなことを綿々めんめんと言う。Mさんにしては珍しいことである。でも、直ぐにまったく同じような話をTさんに聞いたことを思い出した。それで聞き終わるや否や叫んだ。それは「男の更年期」に違いない……………。

そうしたらMさんは少し恥ずかしそうに精液に血が混じると続けた。すでにTさんからも聞いていた話だった。それで、続けて「それは赤玉ポンだ」と追い打ちを掛けた。

Tさん曰く、毛細血管が老化すると膨張時に切れ、それが混入するようになるのだという。悪い病気ではないかと心配で、病院で検査した。しかし、問題は見つからない。最後に主治医が「実は私もそうなんですよね」と言われ、ホッとしたと同時に改めて年齢を感じたと、酔っぱらって語った。

それを聞き終わるや僕は「それがきつと、昔から言われている赤玉ポンだ」と叫んだ。「そうか、間違いなく赤玉ポンだ。すると俺たち後は空気だけか」ということで、大笑になった。

この話をMさんにした。Mさんはホッとしたようだった。しばらくしてからMさんから聞いた。「やつぱり赤玉ポンでした」——その電話の声は、ホッと安心し弾んでいたが、どこことなく悲しそうに聞こえた。

これでほぼ同世代の飲み仲間の五人のうち三人が赤玉ポンになった。その一人、作家のSさん（このシリーズを読んでいる人には直ちに誰だか分かると思うけれど、ここではあえて名前を伏せる）に到っては、酔うと赤玉ポンだということを自慢する。自慢すると同時に、そうでないヤツは変だと主張する。ついには、まだ赤玉ポンではないと僕が抵抗すると「だいたい、おまえはおかしい。これカッラだろう」と髪を引っ張る。

こんな他愛ないやり取りが心地よい。ちなみに、もう一人の同い年のMさんの口癖は「人間、全身の毛の総本数は同じである。これを相対毛原理という」というセリフだ。

実はMさんは見事なハゲと見事な胸毛の持ち主である。その上、幾多の修羅場を潜り抜けてきたような貫禄がある。とても太刀打できない。「おまえも赤玉ポンか」とでも尋ねようものなら、「おまえらバカか」という雰囲気である。

ベルトをゆるめ、「おい、勝負しよう」と結構、真顔で言いだしかねない。こうなれば逃げるしかない。話題を変えるしかない。

「六本木ヒルズ」

幸い、あたりさわりのない話題はいろいろある。この数年前から都心では大規模再開発事業が花盛りで、昨年は品川や汐留などが営業を開始し、東京駅前の丸ビルも生まれ変わった。そして今年の四月二十五日には、きょうみしんしんいったいどんなものになるのかと興味津々だった六本木ヒルズがついにオープンした。

「なんだ、まだ行っていないのか」、「あそこは凄すげかったぞ」、「あれじゃ駄目だな」など、各人各様のコメントをいくらでもできる。

今、住んでいるマンションからは六本木ヒルズ森タワーがよく見える。写真、中央右の茶色のノッポの建物（一フロア二軒という億ション）の後ろに広がる迎賓館や東宮御所がある緑の一带の右奥に高く聳そびえている。二段重ねになっているような特異な形状のビルだ。（矢印のビル）

日々、目に飛び込んでくるビルだし、その近くに住んでいたこともあるので無視はできない。早速、オープンの翌日、土曜日の午前中に様子を見に行った。まだ混んでいなかった。地図をもらってトレンディーダという店をうろうろする。

でも感性が麻痺したのだろう、そそれない。それでも折角来たのだからということ、カネを払い、展望フロアに行った。



東京タワーよりも遙かに眺望が良い。東西南北を眺める。昔、住んでいた元麻布のマンションや三フロアをオフィスにしていた六本木飯倉片町のマンションなども識別できて興味が尽きない。

いま住んでいる高層マンションも遠くに見えた。写真では地平線に飛び出ている

塔（防衛庁の無線塔）の左側にある建物だ。周囲に高層ビルがないのでひととき目立っている。（矢印のビル）

ビルを出ると足は自然に昔馴染みの麻布十番に向かった。徒歩五、六分の距離にある商店街は見違えるほど綺麗になった。街路樹のカツラの新緑がみずみずしく、ハナミズキの花が満開だった。

振り返ると六本木ヒルズを構成する森タワーと高層の住宅棟群の偉容が目飛び込んできた。どんな人が入るのだろう。分譲マンションはもちろん億ション。賃貸マンションは月額家賃二百万円ぐらい。そこに等価交換で部屋を貰った地元の人たちも住んでいるという。でも普段の生活が実感できない。「大変なのじゃないかなあ」と思わず口に出た。

日本航空の雑誌「アゴラ」の十一月号に「六本木ヒルズ、その後」という特集記事が載っていた。

「オープン後僅か二ヶ月で来場者一〇〇〇万人を超えた六本木ヒルズ。『食事と買い物を楽しむ街』という情報が先行しているが、本来は住民、就業者併せて二万五〇〇〇人という地方都市並の顔を持つ。開業して六ヶ月。暮らし、働く人々の六本木ヒルズを検証してみた」。居住者人口は二〇〇〇人だという。



そのトップが地元で昔、金魚屋をやっていた再開発組合理事長の話だ。道幅が狭く消防車も入れず「以前は火事や天災が起こったら、どこに逃げようかと、そんなことばかりを考えていました」「安全な街になるのなら、ご先祖様も許してくれる」と決め、再開発に同意し、理事長も引き受けた。現在は四十一階の四LDKに暮らし、奥さんと娘さんの三人で太極拳を習う日々を過ごす。「再開発の話を頂いてから十七年。当時は五十六歳だった僕も七十三歳になりました。完成するまでは一日でも早くと思っていました、今ではできるだけゆつくりと時の流れを感じていたいと思います」と語る。そんなことが書かれていた。

僕が麻布十番で地元の人から小耳にした話とはまるで違う。等価交換で部屋をいくつか手に入れた人たちは、部屋の家賃収入で生活する計画だったのに、借り手が見つからない。それなのに自分の住んでいる部屋を含め、高い管理費だけ払わなければならない。固定資産税の負担もある。とても生活が成り立たないという事で、このところ安値で叩き売って引越す人が相次いでいる。だから「表には出ていないけれど、えらく値下がりしているようですよ」という。

確証はないけれど、ありそうな話である。ちなみに六本木ヒルズ森タワーは地上五十四階、高さ二百三十八メートル、一フロア四千五百平米で、その主なテナントは、グッドウィルグループ、ゴールドマンサックス、コナミグループ、コムスン、サイバード、JWAVE、フレッシュネスバーガー、ヤフー、楽天グループ、リーマンブラザーズ（五十音順）。何となく近寄りたくなる陣容である。

まんじゅしゃげ はぎ きんもくせい
曼珠沙華、萩、金木犀

ところで先ほど麻布十番のハナミズキの話をしたが、それ以外にも都心の真ん中の身近なところで、結構、季節を感じさせる草花や花木が見られる。例えば、神宮外苑である。春はしだれ桜などが綺麗だし、夏は深緑そして秋は黄金の銀杏並木が見事だ。さらに今年は銀杏並木の外側のちよつと人目に付きにくいところに曼珠沙華が咲いているのを見付けた。彼岸花とも呼ばれる通り、ちょうど秋の彼岸のころだ。

寺の境内や墓地によく咲いており、すじ 凄毒がある、しびとばな 死人花とも呼ぶと聞かされていたので、子供の頃は、その燃えるような赤が血のように見えて気持ちが悪かった。「赤い花なら曼珠沙華 まんじゅしゃげ オランダ屋敷に雨が降る」を駆り立てた。

赤い花なら 曼珠沙華 まんじゅしゃげ

オランダ屋敷に 雨が降る

ぬ 濡れて泣いてる じゃがたらお春

みれん 未練な出船の あゝ鐘が鳴る

ララ鐘が鳴る (「長崎物語」)

調べたら、曼珠沙華 まんじゅしゃげ は中国原産で、確かに猛毒だという。中国では球根を砕き水に溶かし殺虫剤にしたり、球根を乾燥させた粉末をネズミ取りにしたりした。日本でも古くは土蔵の壁土に混ぜてネズミの侵入防止に使った。墓地に多いのはネズミや獣による土葬の死体荒らし対策のためなどと書かれていた。やつぱり曼珠沙華 まんじゅしゃげ の赤はただ者ではなかった。

四ツ谷から上智大学横の土手を通り、紀尾井坂へ出て、そこから弁慶橋へと抜けるルートも四季を通じて楽しめる。

花見スポットとしてすっかり有名になっていく土手は、深緑の夏の早朝は絶好の散歩道になるし、枯れ葉の時期は都心とは思えない趣 おもむき がある。それに紀尾井坂の銀杏並木、紀尾井坂と弁慶橋の間「紀尾井町通り」の八重桜も見逃せない。



さらに今年の秋には、「紀尾井町通り」沿いの清水谷公園で萩^{はぎ}を見付けた。

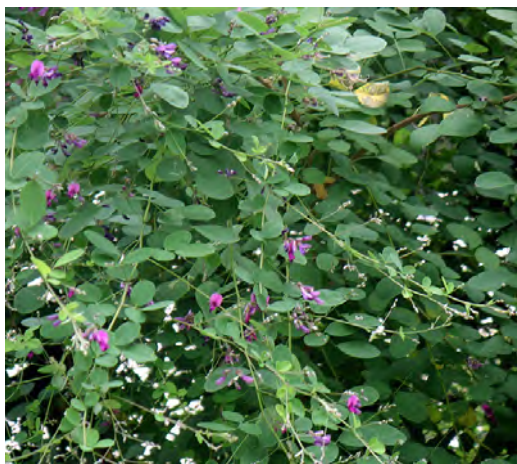
清水谷公園は、大学時代はデモのメッカで、会場場所になっていた。その名残のように紀尾井坂で暗殺された大久保利通を悼^{いた}む碑がポツンと建っている、何となくうらぶれた所だった。取り残された雰囲気のところだった。

その清水谷公園が生まれ変わっていた。「清水谷」の名前の由来となった清水の湧^わく池も、碑の周囲も、遊歩道も、整備され、鬱蒼^{うつそう}と草木の茂る雰囲気を残しながら見違えるほど綺麗になっていた。

そして清水にちなんだのだろう、玉川上水の水を各所に給水するためには木製の樋が使われたが、その分岐のために使われた大きな石枡^{ます}も展示されていた。

ここで萩^{はぎ}の花を見付けた。根本には藪^{やぶ} 枯^{がら}や猫じゃらしや蚊張^{かやつりぐさ}吊草^おなどが生い茂る。都心ではすっかり忘れられた風情である。無性^{むしよう}に嬉しくなった。

そして自宅近くでも、横道に入ると、自動車の騒音は聞こえなくなり、金木犀^{きんもくせい}の強い香りが漂ってきた。フツと子供の頃にタイムスリップするような懐かしさを覚える香りである。もう秋は深い。



もつとも自宅としている二十八階のマンションの部屋から下を眺めると、まったく異質の世界である。工事現場と、その合間の紅葉が目立つようになっていいる。

真下には、某銀行の会館後に野村不動産が建設していた六階建のマンションが間もなく完成する。その先の別の銀行の寮も更地とされ、先日、工事開始の儀式が行われた。さらに、その奥、矢印の箇所では三菱地所がマンション建設を進めている。ショベルカーやブルドーザが活躍している。ちよつと前までは某銀行の豪勢な会館が建っていた場所である。

遠く千葉方向には幕張の高層ビル群の左手にクツキリと人工スキー場「ザウス」の異様が見える。しかし、一九九三年の開業から約十年経って、いま解体が進められている。間もなく姿を消すだろう。

姿を消すのは「ザウス」だけではない。写真に写る低層の建物のほとんどが官公庁の宿舍と金融機関の会館や行員寮である。数年の間に、取り壊され、マンションなどとなり、風景は一変するだろう。

都心は絶え間なく、あたかも自律した意志を持っているかのように姿を変えている。その様子を眺めていると月日は過ぎてゆく。

(二〇〇三年冬)

